

濱川

- ・ESLで、英語を母国語としない生徒向けのプログラム。具体的には決まっていない。

松岡教授

- ・短期間ではスキルアップは無理だろうが、「知りたいと思ったら発言する」トレーニングとして位置づければよい。下手な英語でも聞くのが大切。

濱川

- ・今年のアメリカ研修では、最終日にやっとガイドの学生と話せるようになった。

高田准教授

- ・英語の感覚として、相手がどのようにしゃべってくるのかわからないのでは。イメージを事前につくるのがいいのでは。

濱川

- ・事前学習で「原子核」をした。「核分裂」のYOU TUBEを見せた。

安田教授

- ・英語の力があるのに活かされていないのではないかと。TOEICとか、動機付けがあればよいのでは。
- ・SS部の大会は、学校から1つしか出せないのか。

細井

- ・そんなことはない。物化生地のものでよい。今年は生物と化学も出た。生物はだめだった。

安田教授

- ・積極的に外の大会に参加して欲しい。

神教授

- ・SS部の部員が増えたのはなぜ。

濱川

- ・1年SSコースに「SS部に兼部でもいいから入りなさい」と指導した。しかし運動部との兼部は無理で、やめたり、週1回しか来ない子とかいる。

松岡教授

- ・課題研究の実験データの見せ方に工夫がある。実験をどのように見えるようにするか。解析をうまくやっている全国のSSH校の報告を生徒に見せると役に立つのでは。

安田教授

- ・課題研究はいつやっているのか。

濱川

- ・水曜日5, 6限。あるいはSS部の活動日に行っている。

安田教授

- ・生徒が自由に、やりたいときにやれるのがいいのでは。生徒が自ら取り組むようになる。

細井

- ・例年では、この時期以降、毎日行う。

6 平成25年度事業（コア事業）実施状況の説明（SSH担当（細井）よりレジュメに従って）

7 コアSSH事業に関する指導助言

松岡教授

- ・「高校生アシスタント」では、高校生は説明する側だったが、アンケート「14 考える力」からも、肯定的な感想があった。「小中学生に教える」目的がかなり達成されてきたのでは。

齋藤教授

- ・SSHといえば「課題研究」。他の高校の課題研究に接する機会はあるのか。

細井

- ・本校の代表になれば全国の研究に接することがあるが、県内には発表しあう場がない。

齋藤教授

- ・県内に発表の場があればとても励みになる。

細井

- ・県内はSSH校4校で、あと米原高校。虎姫高校は今年からで、中間発表でポスターをつくっているはず。

8 その他（濱川）

本年度SSH研究発表会（平成26年2月19日（水））は滋賀県立大学で実施予定。

終了後の運営指導委員会とあわせて、1日のプログラムになる。

9 閉会（富江主査）

第3回運営指導委員会

日時： 平成26年2月19日（水） 14:45 ~ 16:15

場所： 滋賀県立大学 A1-208会議室

司会： 嶋原 良裕（学校教育課）

出席者： 運営指導委員 8名 彦根東高校関係者 4名

欠席者： 安田寿彦（滋賀県立大学） 齋藤 修（長浜バイオ大学） 草野 圭司（滋賀県教育委員会）
青木 靖夫（学校教育課） 川崎 佐剛（学校教育課）

- 1 開会の挨拶 富江 宏（学校教育課） 善住 喜太郎（彦根東高校学校長）
- 2 日程説明
- 3 平成25年度事業(通常事業)実施状況（SSH担当濱川より）

第2回運営指導委員会後の事業について

- ・2月11日 数学オリンピック本選にSS部数学班2年生がすすんだ。
- ・2月26日以降 研究発表のポスターの制作と論文作りに入る。ポスターは3月15日の「サイエンスフェスティバル」に向けて。論文は3年の夏までに仕上げる予定。
- ・3月25・26日 新2年SSクラス 関西研修。理化学研究所等を研修予定。

来年度アメリカ研修について

- ・英語によるコミュニケーション力・発表力を高めるために来年度のアメリカ研修を修正する。

日程 変更なし 人数 変更なし 日程 1泊増で9泊10日

訪問場所 ボストン・ニューヨークのみ。ボストンでは大学の寮に宿泊，午前中 科学英語の研修，午後 MIT 等研修。ニューヨークではホームステイ。

4 通常事業に関する指導助言

松岡教授

- ・今日の発表は、きちっとしていてすばらしかった。先生方のバックアップもすばらしい。「最初に身近なところからテーマを探す」というのがよかったと思う。新しくなくても学問的に学生の力につながる。

宇田川教授

- ・課題研究を通年にすることに賛成だ。今のままでは、出た結果をどう発展させるかというところまでできていない。これから進めて、探究心を追求できる。

高田准教授

- ・通年の研究はよいことと思う。中間発表的なものがあるとよい。今日くらいのが中間発表。
- ・「建築」に使えるようなものがあった。ものづくりにつながるようなものがあり、楽しみ。

松岡教授

- ・生徒はそのようなことは気づいていない。サイエンスが社会に役に立つことを気づかせてやることも大切。

神 教授

- ・結論にすぐ飛びつきたがる。「その理由でその結論になるのか？」と思うものもあった。答えに向かっている途中のへんなことがおもしろい。教師がどの程度教えるかがポイント。
- ・高校生の「語学」のモチベーションは「大学入試」だが、それ以外にどういうモチベーションがあるか。アメリカ研修に行かない生徒はどうか。

松岡教授

- ・滋賀県立大学では3年次の専門科目の時、「企業の研究者になったら、特許は英語」「4回生になったら英語の論文をたくさん読むことになる。いずれ英語は必要になる」と言っている。世界で勝負するなら英語は早いうちに。少しでも通じたら自信になる。

高田准教授

- ・建築学科では、1年交替でスペイン・韓国の大学とワークショップしているが、学生はここでショックを受けるようだ。アメリカ研修で、ちゃんとコミュニケーションできなくても大学でちゃんとできればいい。

宇田川教授

- ・うまくしゃべったから必ずしも相手が理解してくれるとは限らない。いろんなところへ出てコミュニケーションをはかるのがよい。

濱川

- ・今年のアメリカ研修で、片言の英語でも質問するような子がいなかった。研修最後になって少ししゃべった。初めからしゃべれたらよかったのと思う。

神 教授

- ・アメリカへ行くのは敵地に行くようなものだから、逆に、来てもらうと違うかもしれない。

松岡教授

- ・うまくいっているのは、スペインと韓国だからではないか。英語圏の生徒では、まくしたてられて終わり。海外でSSH校みたいな高校の生徒を日本に来させる、というのもひとつではないか。

神 教授

- ・データの取り扱いについて。高校の数学レベルで、データとして取り扱うことができるのか。

松岡教授

- ・高校の数学では「平均とって標準偏差とって」くらいはできるだろうが、「違いが生じる確率は何パーセント」くらいになると高2では無理。内容を理解していなくても、「このやり方があるからやってみなさい」と教えてもよい。

5 平成25年度事業（コア事業）実施状況の説明（SSH担当 細井による説明 レジュメに従って）

- ・「地域の科学力向上事業」について 連携校との協力がとれた。本体事業でやってきたことがコアで活かされた。連携校をもう少し増やしてもよいかもしれない。興味・関心のある子は効果があるので是非来てもらいたい。
- ・「未来の科学者養成事業」について これも本体事業でやってきたことが活かされた。講座は単発だったので、連続の講座にしたい。
- ・「科学部等活性化事業」について 連携がうまくいかなかった中学には出向いていくことにする。

6 コアSSH事業に関する指導助言

松岡教授

- ・「地域の科学力向上事業、未来の科学者養成事業を、周辺地域の教員に研修会として開放したい」とあるが、事業直後に、質疑応答や座談会などをしたか。

細井

- ・していない。

松岡教授

- ・事後アンケートは、学校が集計してまとまった形でないと、戻ってこない。事後にすぐ戻してあげるのがよい。「悩み相談室」的にやってみると小中の先生の力がつく。

神 教授

- ・濱川教諭は、小学生に授業したのは初めてのことか。

濱川

- ・はじめて。

神 教授

- ・小学生に授業してみると、高校生に教える方法がわかったりするのではないか。

濱川

- ・「電磁石」の実験をした。高校でも同じことをするが、小学生に対して授業する方が丁寧に準備した。

神 教授

- ・高校生でも小学生並みにすると、より理解ができるのではないか。

濱川

- ・小学生の方が反応はストレートだった。

高田准教授

- ・コアSSH指定受けて、2年前はどうなることかと思っただが、うまくいってよかった。
- ・中学生向けの講座が抽選するほどの人気になったのはなぜか。

細井

- ・学校説明会で実施したので、本当のところ、「体験入学」と捉えている。

濱川

- ・中学生がどのくらい「SSH」を捉えているのかわからない。入試・入学時にSSコースの希望を増やすことが大切。

猪田教頭

- ・中学生の保護者に説明もしている。近年はよく知っていただいている人もいる。知った上での質問も

してくれる人もいる。

善住校長

- ・県内のすべての中学にSSのパンフレットを配布してもらっている。

神 教授

- ・コア事業には「トップを育てる」と「底辺を上げる」がある。

濱川

- ・当初は「トップを育てる」だけだったが、「底辺を上げる」も入ってきた。裾野を広げないとトップは増えないと思う。

神 教授

- ・裾野の評価が聞こえてこない。

7 その他

濱川

- ・来年の夏、全国大会に持って行く課題研究を選んでほしい。

神 教授

- ・「篩にかけた粒子の運動モデル」はおもしろいが「半見え」もう少し先までやってほしい。
- ・「気温と風力の観測」は1年中実施したらおもしろい。
- ・「アワヨトウ」は先輩からの連続性がある。

松岡教授

- ・「ミルククラウン」はいろいろ手法を考えていた。現在のデータ量としてはこれがいいのでは。ただ同じようなことを他の高校でもやっているかもしれない。

高田准教授

- ・どの研究も「その先」がおもしろくなる。

松岡教授

- ・半年しかしていないから。時間がない場合、おしえていないふりをして4、5個、可能性として示してやるとそれに対する実験の方法を考えてくるのでは。
- ・1年かけるか、もしくは後輩に伝えるか。必ずしも新しいことをする必要はない。

高田准教授

- ・「篩にかけた粒子の運動モデル」は、「建築」のなかでは、「集まった人をどのように避難させるか」等のシミュレーションに使える。

宇田川教授

- ・「アワヨトウ」は、これから本当はどうだったのかがわかってくる。仮説は間違っている可能性もある。思い通りの実験をしたらおもしろいから、好きなようにやるのがよい。
- ・「ミルククラウン」は、逆を考えるとおもしろい。「こういうクラウンを作るときにはどうするか」など。

松岡教授

- ・表面張力の問題。クラウンができる速度と表面張力が下がる速度の関係など、データの解説をどこまできちんとできるかなど。

8 閉会の挨拶 富江 宏（学校教育課） 善住喜太郎（彦根東高校校長）

平成25年度コアSSH実施報告（【地域の中核的拠点形成】）（要約）

① 研究開発課題	地域の科学力向上を目的とした、小・中・高連携による小学校・中学校段階からの科学教育の支援方法および企画の研究，ならびに各教育機関による連携ネットワーク構築の研究。
② 研究開発の概要	<p>以下の3事業に取り組むことで、地域の理数好きの子どもを増加させ、小・中・高と段階的に科学の心や科学の正しい学び方を習得できるシステムを構築するとともに、地域の学校や博物館等とのネットワークを構築できるのではないかと考える。</p> <p>(1)地域の科学力向上事業 小・中学生が科学と親しみ、理科への興味・関心を持てるよう、本物の科学に触れさせるとともに、「科学」の理解につながる理科や算数（数学）の授業方法を研究し、教育力を上げる。市町教育委員会と連携し、研究の中心的な役割を担う小学校と中学校を連携校に指定する。</p> <p>(2)未来の科学者養成事業 主に小学校5，6年生と中学校1，2年生の理数に特に興味・関心が高い児童・生徒を発掘し、大学関係者等の専門家による指導を行い、科学的能力の伸長を図る。</p> <p>(3)科学部等活性化事業 日常的に生徒の自発的な科学に対する探究の場を保証し、校内で部活動としての認知が深まるよう科学部活動を支援する。また、他の中学校や高等学校とも積極的に交流して、科学部活動を活性化させ、科学への興味・関心を高め、高等学校での活動に繋げる。</p>
③ 平成25年度実施規模	<p>(1)地域の科学力向上事業 連携小学校計2校（計123名）、連携中学校計2校（計124名）、その他の米原市内・彦根市内の小学校の児童・中学校の生徒および本校生徒</p> <p>(2)未来の科学者養成事業 県内の小学校の児童（67名）・中学校生徒（187名）および本校生徒</p> <p>(3)科学部等活性化事業 連携中学校（計28名）、連携高等学校（計119名）および、県内の科学系クラブに所属する中学生・高等学校生徒および本校生徒</p>
④ 研究開発内容	<p>(1)地域の科学力向上事業</p> <p>①科学を教える基礎講座 理科や算数（数学）における先進的な授業の研究を支援する。 本校周辺連携小・中学校計4校と協力して実施。</p> <p>②小学校出前授業 専門家等による出前授業・講演会の実施。①の連携校で実施。</p> <p>③中学校科学講座 専門家等による科学講演会の実施。①の連携校で実施。</p> <p>④科学体験 周辺2市で、科学体験講座(8/22・12/25)を開催</p> <p>(2)未来の科学者養成事業</p> <p>①コアSSH科学講座（中学生向け講座） 滋賀県内の中学生の希望者対象に、専門家による数学・理科の講座を実施。年8講座を実施。</p> <p>②コアSSH科学講座（小学生向け講座） 滋賀県内の小学生の希望者対象に、専門家による理科の講座と算数の取組を実施。年2講座と1つの取組を実施。</p>

(3) 科学部等活性化事業

① 中学校科学部等活性化支援

県内より特に科学部活動の活発な中学校2校を連携校として、協力して研究に取り組む。
水質調査法研修会(7/24)・ロボット制御研修会(12/14)の開催
コアSSHサイエンスフェスティバルの開催(3/15)

② 高等学校科学部活性化支援

県内より特に科学部活動の活発な高等学校5校を連携校とし、協力して研究に取り組む。
コアSSH夏季合同合宿研修会(8/5・6)・コアSSH科学部研修会(12/26)の開催
コアSSHサイエンスフェスティバルの開催(3/15)(再掲)

⑤ 研究開発の成果と課題

(1) 連携校との連携体制の見直し

昨年度実施した連携校対象の回答や、運営指導委員会等からご意見をうけて、地域の科学力向上事業における連携校との連携のあり方を見直した。その結果、連携校との授業研究開発に昨年度以上に本校が関与する、密接な連携関係が築けた。

(2) 高校生アシスタントのコアSSH事業への参加

昨年度の実施した「滋賀の子どもの科学力向上委員会」からの提案により、本年度は小学生・中学生の参加する事業のほとんどに、本校生等の高校生アシスタントを参加させ、高校生に人材育成面での効果が得られることがわかった。

(3) 地域の科学力向上事業

本年度は本校周辺の小学校2校・中学校2校の連携校と連携した研究開発を実施し、今まで以上に密接な協力関係が築けた。連携校と密に連携し、小学校・中学校の授業と本校の事業が接続するような形で事業を実施した結果、参加者からはどれも高い評価が得られた。また、本校のこれまでのSSH事業で開発した実験・実習を、小・中学校へ提供することで成果が得られることもわかった。

アンケート結果からは、興味・関心の高い生徒を対象に本校で事業を実施した場合、特に高い効果が得られることがわかり、今後の事業展開の参考となった。

本年度、2講座実施した科学体験は、どちらも好評であった。

(4) 未来の科学者養成事業

昨年度はまず、数学(算数)分野より取組を開始したが、本年度は理科分野へも取組を拡大した。中学校数学分野で2回、中学校理科分野で6回、小学校算数分野で1回、小学校理科分野で3回の講座や取組を実施し、どの講座も第3章に示したように、受講者から高い評価を得られた。

また、昨年度、講座受講者の募集に苦慮したが、本年度は他の事業と連携することで募集面での問題点が解消できたことも評価できる。

(5) 科学部等活性化事業について

いくつかの講習会や講演会を実施し、参加者にはおおむね好評であった。テーマ設定等で今後改善すべき点もあるので、次年度は検討したい。本年度もサイエンスフェスティバルの開催を計画しており、昨年度以上の発表数が見込まれる。中学校・高等学校科学部活動の交流および活性化につながるのではないかと期待している。

(6) 教員研修会の実施

未来の科学者養成事業の一部を、彦根市の小学校・中学校教員の研修会として開放した。本校SSH事業の取組を理解してもらうとともに、授業力向上の機会となったものと思われる。また、参加者から、小学校・中学校教員の立場からの貴重な意見が得られた。

平成25年度コアSSHの成果と課題（【地域の中核的拠点形成】）

① 研究開発の成果

1. 連携校との連携体制について

昨年度文部科学省により、本校の連携校担当者対象に実施された「平成24年度スーパーサイエンスハイスクール コアSSHに関する調査」の回答や、運営指導委員会等からのご意見をうけて、地域の科学力向上事業における連携校との連携のあり方を見直した。その結果、学校間での連携を強め、連携校との授業研究開発に昨年度以上に本校が関与する、密接な連携関係が築けた。

2. 高校生アシスタントのコアSSH事業への参加について

昨年度の運営指導員会および、本校コアSSH事業のオブザーバー組織である「滋賀の子どもの科学力向上委員会」からの提案により、本年度は小学生・中学生の参加する事業のほとんどに、本校生の高校生アシスタントを参加させた。その結果、本校の生徒の人材育成面での効果が得られることがわかった。また、連携校の高校生もアシスタントとして参加させた事業では、連携校教員からも、生徒の貴重な経験の場となったという評価が得られた。

3. 地域の科学力向上事業について

本年度は、前述のように、連携校との密接な関係をめざし、本校周辺の4つの小学校・中学校（彦根市・近江八幡市）と連携して研究開発をおこなった。何度も連携校の担当教員と協議し、日程や内容、実施方法について検討した結果、小学校・中学校の授業と本校の事業が接続するような形で事業を実施することにより、参加者からはどれも高い評価が得られた。また、本校のこれまでのSSH事業で開発した実験・実習を、少し形を変えて、小学校・中学校の児童・生徒に科学講座として受講させることが有効であることもわかった。特に、特別な機材や材料が必要だったり、手間がかかっていたりして、小・中学校ではなかなか実施が難しい実験・実習は、実施することにより高い効果があげられた。

科学体験（サイエンスショー）については、昨年度好評であった天体観望会の実施回数を2回に増やした。参加者より毎回高い評価が得られ、本校および連携校における人材育成面での効果があげられた。

4. 未来の科学者養成事業について

昨年度はまず、数学（算数）分野より取組を開始したが、本年度は理科分野へも取組を拡大した。中学校数学分野で2回、中学校理科分野で6回、小学校算数分野で1回、小学校理科分野で3回の講座や取組を実施し、どの講座も受講者より高い評価を得られた。ここでも、本校のこれまでのSSH事業で開発してきた実験・実習を提供することが有効であり、もともと、数学（算数）に興味・関心が高い参加者が、さらに興味・関心を喚起される結果となった。このことは将来の科学技術を担う人材育成のうえで効果があったと思われる。

また、昨年度、講座受講者の募集に苦慮したが、本年度は他の事業と連携することで募集面での問題点が解消できたことも評価できる。ここでも、どの講座にも、本校生がTAとして参加した。参加した生徒にとっては下の年代の児童・生徒を指導することは刺激となったようであり、今後も参加を促進したい。

5. 科学部等活性化事業について

中学校科学部等活性化事業では、連携校の研究活動に役立つような研修会を企画し実施した。参加者からは前述のように高い満足度が得られている。

高等学校科学部等活性化事業では、「琵琶湖の環境と研究方法」をテーマに研修会を実施し、好評であった。科学部では、特に1年次に、こういった専門家による研修会を受講することは効果的であ

ることがわかった。

昨年度好評であった中学校・高等学校科学部合同のサイエンスフェスティバルでは、本年度は、課題研究も2校より発表され、滋賀県立大学からの発表を含めて、昨年度を上回る40作品程度の発表が見込まれ、中学校・高等学校科学部活動の交流および活性化につながるのではないかと期待している。

6. 教員研修会について

未来の科学者養成事業の一部を、彦根市の小学校・中学校教員の研修会として開放した。本校SSH事業の取組を理解してもらうとともに、授業力向上の機会となったものと思われる。また、参加者から、小学校・中学校教員の立場として貴重な意見が得られた。

② 研究開発の課題

1. 事業全体

本年度の事業に参加した高校生アシスタントは、本校SS部員が中心であった。次年度は、募集の範囲を理系生徒全体へ拡大したい。

講座受講者の募集に関しては、今年度工夫をした結果、昨年度のように募集に苦慮することはなくなったが、一部の事業では、特定の小学校・中学校の教員の協力で参加者数が確保できているものがあり、募集面での課題は残っている。本校の事業への参加者からは、おしなべて高い満足度が得られているので、いかにして興味・関心の高い生徒のもとへ募集情報を届け、参加してもらうかが、今後の課題である。

本年度以上に、本校のコアSSH事業の講座を、周辺の小・中学校教員の研修会として開放したい。

2. 地域の科学力向上事業

昨年度よりも密接な連携を目指したため、連携校数が減少した。本年度の取組により、本校SSH本体事業等で開発してきた実験・実習を小学校・中学校へ提供していく形であれば、本年度以上に連携校数が増加しても、無理なく対応できると思われる。今後、さらに地域の学校との連携をすすめて、取組の普及をすすめたい。

アンケートの結果を見ると、興味・関心の高い生徒を対象に本校で事業を実施した場合、特に高い効果が得られていることがわかる。今後は、地域の科学力向上事業の連携校にご協力いただき、興味・関心の高い生徒を集めて、連続した科学講座を実施するような取組を実施したい。

3. 未来の科学者養成事業

地域の科学力向上事業とも連携しながら、年間を通じて複数回受講でき、継続的に受講者の能力を高めていけるような形式に発展させていけないかと考えている。

4. 科学部等活性化事業

連携校が遠方のため、連携がうまくいかないことがあった。来年度は、より良い連携のあり方を検討したい。また、コアSSHサイエンスフェスティバルの規模を大きくして、一層の交流や普及を図り、県外中学生の参加や、課題研究・自由研究等の出展の増加についても検討したい。

第1章 研究テーマ

1. 研究テーマ

地域の科学力向上を目的とした、小・中・高連携による小学校・中学校段階からの科学教育の支援方法および企画の研究，ならびに各教育機関による連携ネットワーク構築の研究。

2. 研究の内容

次の3つの事業に取り組んでいる。

(A) 地域の科学力向上事業

純粋な思考ができる小中学校時代に，子どもたちが科学と親しみ，理科への興味・関心を持てるよう，本物の科学に触れさせるとともに，「科学」の理解につながる理科や算数（数学）の授業方法を研究し，教育力を上げる。市町教育委員会と連携し，研究の中心的な役割を担う小学校と中学校を連携校に指定する。

(B) 未来の科学者養成事業

高等学校入学後，世界に通用する科学的能力にまで伸展させるためには，意欲のある児童・生徒に，小学校，中学校時代から基礎的な理科や算数（数学）の知識を身につけさせるとともに，科学的な探究方法を磨くことが重要である。

このため，主に小学校5，6年生と中学校1，2年生の特異な能力を持っている児童・生徒を発掘し，大学関係者等の専門家による指導を行い，科学的能力の伸長を図る。

(C) 科学部等活性化事業

日常的に生徒の自発的な科学に対する探究の場を保証し，校内で部活動としての認知が深まるよう中学校の科学部活動を支援する。

また，全国の中学校や県内高等学校とも積極的に交流して，科学部活動を活性化させ，科学への興味・関心を広げ，高等学校での活動に繋げる。

上記の3つの事業に取り組むことで，地域の理数好きの子どもを増加させ，小・中・高と段階的に科学の心や科学の正しい学び方を習得できるシステムを構築するとともに，地域の学校や博物館等とのネットワークを構築できるのではないかと考える。

また，そのことにより，将来，科学オリンピック等で活躍する人材が育ち，滋賀県の中で科学者を目指そうとする優秀な人材が増えることを期待している。

第2章 研究開発の経緯

1. 研究組織

本研究を実施するにあたり、本年度も次の4組織を設けた。

1：滋賀の子どもの科学力向上委員会

本研究計画全体を進行管理する組織。大学等の学識経験者，滋賀県教育委員会事務局学校教育課担当者，滋賀県総合教育センター研修指導主事，連携市町教育委員会代表，連携中学校長代表，連携小学校長代表，彦根東高等学校長より構成。

2：科学力向上プロジェクトチーム

「地域の科学力向上事業」を企画運営。本年度は，各連携市町担当者，連携各校担当者，本校SSH推進室より構成。

3：科学者養成プロジェクトチーム

「未来の科学者養成事業」を企画運営。学識経験者，滋賀県総合教育センター研修指導主事，本校SSH推進室より構成。

4：科学部活性化プロジェクトチーム

「科学部等活性化事業」を企画運営。推進中学校担当者，中学校理科教育研究会員，連携高等学校科学部担当者，琵琶湖博物館連携担当者，本校SSH推進室より構成。

2. 3つの事業の実施

A. 地域の科学力向上事業

(1) 科学を教える基礎講座

理科や算数（数学）における授業の研究を支援する。

平成24年度の連携事業を見直し，本年度は，本校に近い彦根市内の小学校1校，中学校2校，近江八幡市の小学校1校を連携校に選定し，連携事業を実施し，教員や生徒の交流をより活発におこなうことを目指した。

(2) 小学校出前授業

大学等の専門家や中学校・高等学校の教員，本校生徒等が小学校へ出前授業を実施。

(1)の連携校において実施。

(3) 中学校科学講座

科学を学ぶことに興味・関心を持たせるような講師による科学講演会を中学校で実施。

(1)の連携校において実施。

(4) 科学体験（サイエンスショー）

小学校から一般までを対象に，科学についての講演会やサイエンスショー等を実施。

B. 未来の科学者養成事業

(1) 小学校科学者養成プログラム（主に小学校5・6年生対象）

基礎的な理科や算数の学力と科学的探究力の入門編となる講座を開催（8月）。平成24年度は，算数分野のみであったが，本年度は理科および算数の分野で実施した。

(2) 中学校科学者養成プログラム（主に中学校1・2年生対象）

幅広い理科や数学の学力と科学的探究力が磨かれる講座を開催（7月～8月・10月）。平成24年度は数学分野のみであったが，本年度は，理科および数学分野で実施した。